

ピュアランド

～ 出会いが人生を作る ～

名 倉 幹
水 上 雅 裕

【森際】 みなさん、こんにちは。宗教講座にようこそ。私はライフデザイン学科の森際です。さて、みなさんは『ピュアランド』という映画が間もなく公開されるのをご存知ですか。今日はこの映画に登場される、名倉幹さんというお坊さんと、この映画を制作されている映像作家の水上雅裕さんにご登場いただき、「出会いが人生を作る」というテーマでお話を進めていきたいと思います。

まずは映画の一部をご覧ください。

(映画上映)

【森際】 今の映画を見て分かるように、映画の舞台はニューヨーク。現在もニューヨークにいらっしやる名倉さん、南米コロンビアの首都ボゴタにいらっしやる水上さん、そして日本からは第一部の進行を務めます森際と、第二部で対談の司会をしていただく真宗文化研究所所長の小澤さん、この四人で本日の宗教講座を進めていきたいと思えます。

それでは、第一部の講演を始めます。浄土真宗僧侶で北米開教使の名倉さん、よろしくお願ひします。

【名倉】 私は名倉幹と申します。ニューヨークに渡って八年になります。私は東本願寺の坊主でございます。開教使というんですけれども、海外で、みなさんと一緒に仏法の話の聞いたり、伝えたりするお役目をいただいております。今回は光華のみなさんと同じく

人とのお会い(縁)って不思議ですね。
私が海外で得たご縁が、映画になります。
豊かな人生を目指して、光華に集ったみなさん！
扉を開けてみないと分からない景色があります。

京都

ニューヨーク

ボゴタ

豊かな人間性を目指して

ピュアランド
~出会いが人生を作る~

浄土真宗 僧侶/北米開教使 名倉 幹 なくら みさ
映像作家 水上 雅祐 みずがみ のりひさ

映像作家 水上 上さん

京華女子大学/京都光華女子大学短期大学部
2020年度 第3回 宗教講座 2020年10月30日

うふうにお話できることを、私自身、本当に嬉しく思っております。実は、私は光華を卒業した者でございます。私は京都生まれで、光華のすぐ横の桂という所に八歳までおりました。一九六〇年代に、本当に不思議なご縁で、光華幼稚園に通っていたわけです。もう五十年以上前の話でございます。それが、こうして光華のみなさんの前でお話ができることは不思議としか言いようがないと感じております。

苦惱、そして出会い

私は桂で生まれまして、大阪で万国博覧会があった翌年の一九七一年に、八歳で大阪の豊中に引っ越しました。私は普通のサラリーマンの



家庭で育ちました。お寺の生まれでも何でもないので何で坊主になったか？ 私自身も本
当に不思議な人生やなと思っっていますし、みなさんからも「名倉は不思議な人生やな」と
言われています。

私は普通の大学へ行っただんですが、その時に私の父が食道癌になりました、それが一つ
の大きな縁でした。父が五十代で食道癌になり、「あと一年」と言われて、初めてわが家
に大きな嵐が吹いたんですね。その時に母がとても落ちこみまして、父が死ぬということ
をなかなか受け止められなかつたんです。そして父は実際に一年で亡くなってしまつたん
ですけれども、ちょうど私が大学四回生の時で、進路が決まっていたんです。関西育ちで
したから、東京へ出て世界へ羽ばたきたいと、それも自分が一番行きたい会社に内定をも
らっていたんです。鉄鋼メーカーです。それで私も内心非常に喜んでおったわけですが
ど、ちょうど父の死と重なって、母が非常に落ちこんだこともあって、そういう家庭環境
から内定をもらつた会社に行けなくなつたんです。私はものすごく悔しい思いをしまし
た。内定をもらつて、この会社で羽ばたこうと思っていたのに潰されたわけです。そし
て、自分では向いてない、働こうとはこれっぽっちも思っていなかった銀行へ行くこと
になりました。銀行といったら給料も多いし、安定もしてるし…、外から見ればそうですけ

れども、私自身は向いていないと思っていました。三十三年前です。そして実際に大阪で働くことになったんですけれど、父が死んで、母が落ちこんで、進んで行こうと思っていなかった仕事をすることになって、内心、非常に悶々としとったわけです。何でこんな目にあわなあかんのやと。でも、それが良かったんですね。この時に私に非常に大きな出会いがありました。神戸にお住まいのあるお婆さんなんですけれど、そのことが仏教との初めての出会いになりました。お婆さんは非常に深い仏教徒で、私はその加藤さんというお婆さんの人格に非常に惹かれたんですね。私は仏様のお話を聞いたこともなかったんですけど、加藤さんに非常なる安心を覚えて、何でも相談しました。加藤さんは、ご師匠の東本願寺の蜂屋先生にずっと教えを聞いておられたんですけれど、私も、本当に自然に、誰に強制されることもなく、大阪にある蜂屋先生のお寺へ行くようになったんです。銀行の仕事と平行して仏様の教えを聞く生活が二十代前半ぐらいに始まりました。そこからずっと、聞いて、聞いて。よくお寺にも通いました。また光華でも講演がありましたので聞きに行ったこともございます。そうして普通の職業生活をしながら、お釈迦様や親鸞聖人の話を聞くようになりまして、知らず知らずのうちに、私自身気づくことが出てきました。そして、仕事が合わないと私自身で決着もできましたので、十二年勤めた銀行を辞めることに

なりました。加藤さんに導かれて大阪のお寺へ、私より五十も年上の東本願寺のお坊さん、蜂屋先生の法話をしょっちゅう聞きに行っていたわけです。私は当時、プライベートで、仕事がなかなか合わないとか、父が死んでから始まった母との確執とか、また恋愛の失敗とか、会社の人間関係の悩みとか、そういう、家族にも言えない問題を悶々と抱えておったわけですが、それを蜂屋先生にお話したいと申し上げましたら「どうぞ、どうぞ」と快く承諾してくださいました。そして私の悩みを熱心に聞いてくださるんです。ただただ、私の話には、「傾聴」と言いますが、耳を傾けて「ああ、そうですか、名倉さん。ああ、そうですか：ああ、そうですか：」。ひたすら聞いてくださいました。それが私にとって非常にありがたかったんですね。そんなことで、私は、お坊さんというのには偉いもんだなあと思ってたんです。悩める人の話を熱心に聞いてくださる。上からアドバイスしたりしないんですね。同じ目線で私の話を聞いてくださる。それだけで私は、悩みを本当に分かってくくださる人がいるんだと、頷いてくださる人がいるんだと、非常に安心を覚えまして、知らず知らずに蜂屋先生のようなお坊さんになりたいという思いが湧いてきたんです。それが始まりでございます。

しかし、銀行を辞めてからの失業期間も長くて、なかなかお坊さんになるという決心も

できなかつたんです。金銭的にも行き詰まり、ハローワークへ何度も行き、精神的に非常に辛い時期がございました。母に「こんな大の大人がいつまでも仕事もせんと何してんの」と言われても、どうしようもなく次の一歩が出ない。そんな時、私の大学時代の親友に状況を正直に話したんです。「実はおれはこんなになつてしまった」「仕事も次の一歩が出ないし、なかなか考えがまとまらなくなつてしまった」。そうしたら、親友が非常に厳しく言つてくれました。「名倉、お前はな、考えすぎなんや。お前は瀬戸際まで来てるんやから、どんな仕事でもやらなあかんぞ」と。そこから私は、「生きるためにはどんな仕事でもやらなあかん」という気になつて、いろんな仕事をしました。飛び込み営業をしたり、京都の円山公園の上にある宿屋の女将さんを知つていましたので、そこで住み込みをやらしてもらつたり、次から次へといろんな仕事をやって、そこで私は生きるスタンスを得たんです。そして、自分が一番やりたいことは、やっぱり坊さんやということもハッキリしました。そして、人生に遅い早いと言えませんが、私は四十三歳の時に、東本願寺で、「得度とくど（お坊さんになるための儀式）」を受けて、今まで歩んでいるわけでございませぬ。

お坊さんになって

それから私は、海外で仏様の教えをお伝えしたいという希望がございましたので、東本願寺のハワイ別院、ホノルルにあるお寺で四年間、お坊さんの生活をしました。非常にありがたいことでした。ハワイは素晴らしい所で、日系人もたくさんいらっしゃいます。大変可愛がってくださいます。お寺の仕事のイロハもやらせていただいています。アメリカで仏教を伝えるにはどうしたらいいのかという勉強もさせていただきました。アメリカはキリスト教徒が多いんですけれども、潜在的に仏教を求めている人もたくさんいるんですね。特にニューヨークは、世界各国からの移民、たくさんバックグラウンドを持った方がひしめて働いたり住んだりしているので、非常に魅力的なところですよ。仏教を求めている人、静坐、座禅を求めている人がたくさんいらっしゃいます。ニューヨークに東本願寺はないんですけれども、行ったら何かしらの出会いがあると思って、私は今から八年前に決心してニューヨークに渡りました。そして、アメリカ人、日本人、いろんな方と出会いました。最初は住む所も決めていかなかったんですけれども、今回の映画『ピュアラン

ド』に出てくる、恒さんという九十四歳のお婆さんが、「どうか名倉さん、私の家で生活をしてください」「ご援助したい」とおっしゃいまして、「ほんまですかいな」と、本当にありがたいことだと、恒さんのニュージャージーのお家に住むことになりました。もう六年半以上になります。そして、生活の基盤ができて、今、ニューヨークでいろんな方と一緒に、仏様の教え、静坐を学んでいます。そして、これもまた大きな出会いですが、のりさんという若い映画監督と出会いは、今ちょうど編集集中ですけども、『ピュアランド』という映画ができたわけです。

私は、出会いに恵まれました。出会いが人生を作ると本当に思っております。当初は、父の死のおかげで行きたくない会社に行つた、それを悲観的なことに思いましたけど、そこで悩んだからこそ、不思議な、何とも言えないご縁に導かれまして、あげくの果てにニューヨークにまで渡つて、今、こういうふうに活き活きとやらせてもらっています。本当に人生は分からないものです。そういうことを今回、みなさんと一緒に、学び、お伝えできたらなと思っております。ご静聴ありがとうございます。

【森際】 名倉さん、ありがとうございます。それでは次に映画『ピュアランド』を制作

されています、映像作家の水上さんにお話を伺いましょう。

【水上】 みなさん、はじめまして。映像作家をしております水上と申します。本日はこのような機会をいただき、誠にありがとうございます。映像作家といいますが、普段はドキュメンタリーというジャンルの仕事していることが多くて、その仕事の一つとして「人の話を聞く」「人の話を聞き出す」ということをしています。ですから、なかなかこうやって、改まって自分のことを振り返るといいう機会は少ないので、今回は本当にありがたいなと思ってお話をさせていただきます。

僕は京都で生まれました。そして、光華と同じ浄土真宗系の大谷中学校、高等学校を卒業しました。その後に枚方にある関西外国語大学に英語を勉強するために行きまして、結局二年だけ通ったんですが、三年生の時にアメリカのオレゴン州の大学に編入しました。そこで三年生と四年生を終えて、その後日本に戻ってきて東京で就職をしまして、テレビの制作の仕事五年ぐらいさせていただきました。その後、大学院で映像の勉強をするためにニューヨークに渡りまして、その後、ニューヨークで仕事をして、結局六年ぐらいニューヨークにいました。その後、南米コロンビアのボゴタにやってきました。今、みなさ

んにこうやってお話している部屋はボゴタにあります。こうやってお話をすると、世界で活躍している、遠い国の人のような感じがすると思うんですけど、そんなことはなくて、謙遜して言っているわけでは本当になくて、僕は今、三十五歳なんですけど、映像作家として活動したのは二十七歳からなので、今はまだまだ一生懸命やっているとところです。みなさんに何かを教えるというより、僕のこれまでの経緯だったり、プロフィールをお話して、一つでも感じてもらえることがあれば嬉しいなと思って、今日はお話をさせていただきます。

コロンビアのボゴタ

まずは、今、僕が住んでいるコロンビア、ボゴタのことを少しお話したいと思います。南米と聞くと暖かいイメージがあると思うんですが、ボゴタは山の間中部、標高でいうと二六〇〇メートルぐらいにあるので、富士山でいうとだいたい七合目ぐらいですかね、なので実はとっても肌寒い所で、外にはジャケットを羽織って出ることがあります。気候は、乾季と雨季がありまして、一年を通して同じような季節が続くんですが、一年にだい

たい四ヶ月くらいある雨季には雨が非常に多く降る、高山気候の場所です。そんなボゴタに何で来たのかと聞かれると思うんですが、ニューヨークに住んでいた時にですね、あるコンビア人の女性に出会いました、彼女がニューヨークに来るか、僕がボゴタに引越してくるか、の二択だったんですけど、話をして、結局僕がボゴタにやってきたという経緯があります。彼女のことが一番大きな要因だったんですが、振り返ってみると、僕は日本で生まれて、アメリカで生活をして、いわゆる先進国ですよ、非常に恵まれた、ありがたい環境で生活をしてきたんですが、発展途上国のコンビアで生活をするということを二〇一八年から始めて、今、二年と少しになるんですが、とても勉強になっていきます。そういう意味では本当に来て良かったなと改めて思います。普段はボゴタの外に旅行に



行くのが楽しみで、映像作家をやっているのです、旅行に行った時は必ずカメラを持っていて、いろんな写真を撮るようにしています。ボゴタの外には、見たことがないような植物だったり、木だったり、自然が溢れていますので、もし将来コロナビオに来る機会があれば、町だけではなくて町の外、自然にも足を向けていただきたいと思います。

映像作家への道

ここで話題を変えて映画の話をしたんですが、今、制作している『ピュアランド』というドキュメンタリーの話をする前に、どうして僕が映像作家になったのかという、今までの経緯を含めてお話しさせていただきたいと思います。僕はもともと、二〇〇七年にテレビの制作をきっかけに映像の仕事を始めようになりました。オレゴンから東京に戻って、ろくに就職活動もせずに社会人になったんですが、東京の表参道の一本裏通りにある、報道とかドキュメンタリーを制作している会社に入社しました。社会人一年目です。その会社はテレビ局全体では有名なディレクターさんが立ち上げた会社で、そこでドキュメンタリー制作のイロハを教えてくださいました。とても小さい会社だったので、いろいろ

ろやらされまして、企画の立ち上げから放送する所まで全部に立ち会うんですね。大きい会社だったら、制作ADという立場で、なかなか全ての過程を見ることはできないんですけど、逆に小さな会社だったという事で、僕はその会社でゼロから放送までの過程を見せていただいて、今、振り返ると非常に勉強になった時間でした。

そこで見習いのような仕事をさせていたんですが、社会人一年目の時に、ある災難に襲われました。その時、レーシックという視力矯正手術が流行りかけていたんですが、その手術を会社の先輩が受けていて、「水上、とても良いよ」と勧められたんですね。小さい時からずっと視力が悪くてマイナスの要素になっていたことが多かったので、どういう手術かとか、合併症はあるのかとか、というリサーチをあまりせずに手術を受けたんですが、後遺症が発症してしまいました。具体的には、暗いところで物が見えにくくなったりとか、光がキラキラしたりとか、ハロという症状が出たりしました。そして、その後遺症でしばらく悩むことになります。その後も後遺症を持ちながらテレビの仕事を続けたんですが、その手術から二年ぐらいして、再手術が可能だと話してくれる先生がいたので、その先生にかけてみようと思いました。最初の手術はあまりリサーチをせずに受けたんですが、この時は調べに調べまくって、いろんなところに行って、セカンドオピニオン

を聞きまくって、最終的にその先生のところまで再手術をしたんですね。結果は、プラスマイナスゼロ。良くもならず悪くもならずで、後遺症が改善するということは全くなかったんですけど、自分の気持ちとしては、いろいろ治療について調べる生活が終わって、ちょっと落ち着いて、後遺症はあったんですけど、その後もテレビの仕事を続けることになりました。

映像の仕事は、まず「物を見る」というのが仕事の一つなんです。何かを撮るにしても自分で見なきゃいけないし、撮ったものを確認するにしても自分の視力がとても重要になってきます。なので、後遺症を持っているということが自分の中でマイナス要因になって、簡単な言葉で言うと、自信を失った状態、この先、仕事を続けていけるのかな、と思う状況が続きました。テレビの制作AD、みなさんも想像がつかうんですが、本当に精神的に、肉体的に、大変な仕事でして、僕としては後遺症を患いながら仕事をしていたので、疲れた体に鞭を打って放送まで何とか辿り着くみたいな日々が続きました。そういう生活をしばらく続けたんですが、やっぱり後遺症のことが引かかって、これからどうしたらいいのか打開策が見つからないまま五年が過ぎていきました。

そしてある日、映像表現を自分の中で突き詰めたという思いが湧いてきた時があっ

て、それまではテレビの世界でドキュメンタリーや報道の現場制作を経験したんですが、ここで、もうちょっと外に目を向けて、広い意味で映像表現を勉強したいという思いが出てきたんです。いろいろ調べた結果、ニューヨークにある大学院に、ドキュメンタリーを専門的に教えている学科があることが分かりまして、そこに、ちょうど震災があった年、二〇一一年の夏に学校訪問に行きまして、その翌年の二〇一二年に入学をしました。大学院はもともと二年のプログラムだったんですけど、大学院なので自分で課題をこなしていく日々が続きました。ある日、「課題は何でもいいのでショートフィルム（短編映画）を作ってください」という課題があったんです。その時に自分が今まで引きずっていた視力の後遺症に、自分で終止符を打ちたいというか、答えを出したいなという思いが出てきました。それまでずっと引きずっていたことだったので、後遺症とどう向き合っていくのかも含めて、自分の中で答えを見つけるためにも、何かそれに関係する映画を作りたいなと思ったんですね。

ニューヨークは本当にいろんな人がいる町で、例えば、こんな人いるんじゃないかなと思うと本当にそんな人がいたりするんです。だから、僕は一番最初に、ニューヨークで活動している、視力に障害があるアーティスト、芸術家を探して、ドキュメンタリー映画を

作りたいなと思いました。そしていろいろリサーチをする中で、たまたま大学から二、三ブロック先に、盲目であったり、視力障害がありながら写真を撮る活動をしている人たちがいたんですね。僕はニューヨークタイムズの記事で知ることになるんですが、その人たちをまず訪問して、彼らのことを知って、一緒に写真を撮ることになりました。彼らの写真は、手法でいうとライトペインティングという、部屋の明かりを全部消して、ペンライト、フラッシュライトで撮りたいものを描いていくというか、カメラのシャッターを開けた状態で被写体にペンライトを当てて、写真なんです。ペンライトで描いていくような独特な写真なんです。その写真を初めて見た時に非常に心を打たれるものがありました。手法も、もちろん珍しいんですが、それ以上に彼らの写真に対する想い、目は見えないんだけどビジュアルアートとして何かを伝えたいという思いがとても強くて、制作者として、その意気込みとか熱意に打たれるものがありました。二〇二三年の冬に初めて会って、一四年から彼らのドキュメンタリーを制作し始めました。そのドキュメンタリーを撮っていく中でキーパーソンになった方が一人いて、ステイブさんという方だったんですけど、彼は網膜色素変性症という視力の病気を抱えている人だったんですね。彼は芸術大学に行ってたんですけど、卒業間近に病気の宣告を受けて、それ以降、三十年ぐらい視力

を失いながら写真を撮っている人でした。そして、先ほどお話した写真家グループと、ステイブさんを中心としたドキュメンタリー映画を制作する過程で、自分のことも彼に話すようになったんですね。レーシックを受けて後遺症を持っている話だったり、これから自分がどうやって映像と向き合っているのかとか、いろいろ話しました。今考ええると、被写体ではあるんですけど、ステイブさんにいろんな話を聞いてもらえたこと、ある意味、自分のセラピーになっていたような気がします。

この映画は二〇一七年に制作を終えたんですが、『What's Invisible』（目に見えないもの）、というタイトルで、『星を見たことがない男』という邦題が付いています。もしこの映画にご興味がある方は、僕のウェブサイト (<https://norimizukami.com>) に行ってください。けると、彼らの撮っている写真だったり、映画の内容をもう少し分かっていただけるので、ぜひ見てみてください。

名倉さんとの出会い、そして映画制作へ

この映画を終える少し前、二〇一六年に、本当にたまたまのご縁だったんですけど、二

ユーヨークにある日系の本屋さんに、先ほどお話をされた名倉さんが掲載されていた「聞法会」と「静坐会」（メデイテーション）の案内が貼ってあったんです。その案内をたまたま見て、一枚の案内だったんですけど、その下の方に、名倉さんが「東本願寺大谷派」と書かれていて、それを見た時に、僕は懐かしさを覚えたんです。もともと大谷高校を卒業してその後ずっと海外の生活が長かったんですけど、何かとても懐かしいような感覚を覚えて、その夜にさっそく名倉さんにコンタクトを取りました。それから彼が開く「静坐会」とか「聞法会」に頻繁に通うようになりまして、いろんなことを教えていただいたんです。そして、親しくさせていただく中で、ニューヨークの隣のニュージャージーで、日本からアメリカに渡って六十年以上生活をされている、恒さんという、当時、九十一歳の女性と、旦那さんのバーニーさんと、名倉さん三人で暮らすお家に招待を受けました。バーニーさんは仏教徒ではないんですが、名倉さんと恒さんが毎日仏教の生活をされている様子を間近で拝見する機会があつて、その時に僕は映像作家として、これは映像に収めなきゃいけないという使命を感じました。これは仏教のテーマでもあるんですけど、「内観」という言葉がありまして、それを実践されているお二人の生活を間近に見ることができて、その時に僕は、自分に欠けていたもの、自分が今まで苦しんでいたこと、

悩んでいたこと、を解決するヒントがあるんじゃないかなと考えて、「映画の撮影をさせてください」とお願いしたんですね。

この内観という言葉は、僕だけではなくて、この動画を今ご覧になっている方々にも通じるところがあると思います。何か悩んだ時に、苦しくなった時に、僕たちはだいたいの目を向けがちですよ。例えば、自分と誰かを比べたりとか、彼、彼女に出来て何で僕には出来ないんだとか、みなさんも心当たりがあると思うんですけど、そういうふうになりがちだと思います。僕も実際そうだったですし、今もそういう部分はあるんですけど、内観という言葉聞いた時に、いかに自分を見つめることが大事かを勉強させていただきました。仏教を勉強されている、されていないに関わらず、この考え方は、生きる上で心が安らぐ場所を見つげるためにも必要なことなんじゃないかなと思います。実際にこの映画は『Pure Land』（浄土）というタイトルがついているんですけど、いかにみなさんに安心を見つけていただけるか、というところにテーマをおいて映画を作っています。この映画はまだ制作中で、コロンビアで着々と制作を進めているんですが、近々完成させてみなさまにもお届けしたいと思っていますので、楽しみに待っていてください。

メッセージ

この話をいただいてから、みなさんに何を一番伝えたいかなとずっと考えていました。一つだけみなさんに伝えたいことは、僕自身も視力手術の後遺症がきっかけで、すごく悩んで、落ちこんで、ふさぎ込んでいた時期があったんですね。その時期に、たまたまニューヨークで映像を勉強する機会がやってきて、行くべきなのか、行かない方がいいのか、自分の中で葛藤がありました。結果、二〇一一年に学校を訪問したことで、翌年にその扉を開けて新たに踏み出して行ったんですけど、今振り返って思うのは、人生の岐路というか、選択肢が出てきた時に、その扉を開けないと見えない世界があると思うんですね。みなさんもこれから社会人になられるということ、いろんな選択肢があつて、こうすればいいのか、ああすればいいのか、周りにはいろんなことを言う人もいます。「止めておいたほうがいい」とか、「こうした方がいいんじゃない?」っていう人もいると思うんですが、どうぞ、自分の声、自分がしたいこと、自分が成し遂げたいことに真剣に向き合っていたら、ぜひ、その扉を一步開ける所まで進んでほしいなと思っています。間違える

かもしれません。例えば、扉を開けて、やっぱり違ったなと思われることもあるかもしれないです。でも、二十代の間違いっていうのはいくらでも取り返しがつくというか、失敗をして、間違えて、でしか勉強できないことってたくさんあると思うんです。先ほど申し上げましたように、扉を開けないと見えない景色があるので、みなさんにも、大変な時代で、不安を抱えている方もたくさんいらっしゃると思うんですけど、ぜひ、勇気を持って踏み出してほしいというのが僕の今日のメッセージです。

最後に『ピュアランド』のことを少しだけお話して今日の話を終えたいんですが、この映画は二〇一七年に制作をスタートさせまして、今日に至るまで本当にいろんな方々にご支援、ご協力をいただいています。二回、クラウドファンディングで制作資金を集めさせていただいて、いろんな方に寄付をいただいて、その方々のお力がなければ今日こうして僕たちがコロナピアで編集するということはなかったので、改めてお礼を申し上げますと思います。光華でもたくさんの方にご寄付をいただいておりますので、編集が終わって、無事、映画が完成した際には、光華にもこの映画を届けに行きたいと思っていますので、ぜひ、楽しみにしててください。本日はどうもご静聴ありがとうございました。

【森際】 水上さん、ありがとうございます。今回は水上さんのご厚意で公開前のサンプルリードを届けていただきましたので、その一部をご覧ください。

(映画上映)

【森際】 これで第一部を終了します。では、第二部、対談のスタートです。対談には第一部でご講演いただきました名倉さんと水上さん、そこに今回の宗教講座をコーディネートした森際、そして司会者として真宗文化研究所長の小澤さんが加わります。それでは四人の対談をお楽しみください。

【小澤】 ありがとうございます。ここまで映画『ピュアランド』に登場しました名倉さん、その映画を制作



された監督の水上さんのお話をいただきました。ここからは第二部として、森際さんに入っていたきまして、お話を聞くとという、第二部に入っていたきと思います。今、私は森際さんと言ったんですけど、この前の打ち合わせで、今日はこの中ではみんな「さん付け」で行こうということになったので、森際先生を森際さんと呼んで進めていきます。よろしくお願いします。

まず、私の方から説明をしたいのは、映画『ピュアランド』出演の名倉さん、監督の水上さんに登場いただいているんですが、ピュアランドという言葉をちよつと説明した方がいいかなと思っています。今、光華や、この画面にいます四人を繋ぐのは浄土真宗なんです。浄土真宗の教えは、極楽浄土といわれる世界があつて、私たちは死した後にそこへ迎え入れられる、ということを教えているわけですが、極楽浄土、「浄い土」と書きますが、その浄土を英語圏ではピュアランドと訳するのが一般的になっています。まず、それを踏まえた上で、お話を伺っていききたいと思います。

今、名倉さん、水上さんにお話をいただいで、お二人がいる理由はよく分かるんですが、こちらに森際さんがおられて、なぜ、ここに森際さんがいるか、お二人との出会いをお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

【森際】 私は、実は、七、八年前になるんでしょか、ライフデザイン学科の方で、ハワイ研修を企画して、実現したいと思って学内で頑張っていたのですけれど、その時に当時の理事長、現・学園長の阿部敏行先生からのアドバイスもあって、ハワイに行ったら、ハワイ別院というのがあるのだから、ぜひ、そこを学生に見せてあげてください、そこを参拝しなさい、というアドバイスを受けて、打ち合わせに行った時にいらっしゃったのが名倉さんだったのですね。名倉さんとはそういう形でご協力いただきながら、普通ならそれが終われば縁が切れることもあるのかなと思いますけれども、名倉さんの人柄に触れながら、ハワイにいても、日本にいても、ニューヨークに行かれても、私といろんなところでお付き合いいただいているというところですよ。私が名倉さんをいいなと思うのは、本当に人と人を繋ぐ方なんです。いろんな方が名倉さんを通じて、ハワイにおられたり、ニューヨークにおられたり、また私に紹介してもらえたりということが続いています。ハワイには、ハワイ別院以外にもいろいろ浄土真宗のお寺があるのですが、そことも仲良くさせていただけるようになって、また、その一つのお寺に遊びに行っていた時に、ちょうど水上さんがハワイに映像制作のためにいらっしゃっていたと。水上さんがいらっしゃる時と、私が旅行で行っている時が一致する確率なんてすごく稀なのです。その時にお話を

させてもらって。へえ、すごい方だなあと思っていたのですけど、それが今度、私がニューヨークの名倉さんを尋ねて行った時に、名倉さんを撮影している水上さんがいるというのを知って、これまたご縁だなあと思いました。そして、ニューヨークのタイムズスクエアで水上さんと待ち合わせをして、一緒にお話したりしました。この関係で、京都光華でも映画をみんなに見ていただきたいという気持ちで…。お二人を、今、この画面で光華と繋げたのは私があちこち歩いた中で出来たご縁かなと思って感謝しています。

【小澤】 ありがとうございます。水上さんを名倉さんが繋いでくれたのではなくて、たまたまハワイにいたということですか。

【水上】 パロロ本願寺に泊まらせていただいた時も、最初は名倉さんのご紹介です。それとは別に、サーフィンの映画を撮影してたんですよ。サーフィンの撮影でハワイへ行くって決まった時に、僕はサイドプロジェクトとして『ピュアランド』を作っていたので、せっかくだったら名倉さんのいらっしやったハワイの別院とか、パロロ本願寺の藤森さんとか、いろんな方にお会いしてお話を聞きたいなと思っていましたね。

【小澤】 サーフインの映画と『ピュアランド』を平行して撮られているというのは面白いですね。

【水上】 そうですね。ニューヨークのインディペンデントの映画をやっている人は、二つじゃなくても、三つでも、四つでも、同時進行で制作をしている人は多いと思います。

【小澤】 それは、全然違うものを扱っているなと私なんかは思うんですけど。水上さんの中ではそうじゃない？ 自分の中で描こうとしている本質的なものが一緒だったりするんですか。

【水上】 全然違うんですけど、やっぱり一つあるのが、ドキュメンタリーの映画って本当に何年もかかるんですよ。脚本があつて、それを撮影していくという過程ではないので、誰かの人生に立ち入らせていただいて、何年でも、「映画に出来るな」って監督の納得がいくまで撮影を続けるのが常なので、そういう意味では予定が立てられないというか。人生なのでいろんなことがありますよね。その中で、どこを切り取るのか、どこを最終的な

着地点にするのか、に出会わないと終われないっていうことがあるんですよ。

【小澤】 そういう意味では『ピュアランド』は着地点が出来上がってるということですか。

【水上】 できてましたね。撮り始めた時に構想としては、恒^{つね}さんと名倉さんの普段の生活が主題としてあつて、名倉さんであれば銀行時代であつたりとか、恒^{つね}さんであれば、国際結婚をされてニューヨークに渡られて、お二人の娘さんを育てられて、今に至るまでの六十年の歴史があるので。今回の『ピュアランド』に関しては、僕たちの中では「決めうち」と言うんですけど、もう芯が決まっています、そこを狙って撮っていくというやり方なんですけど、逆にサーフィンの映画のように本当に何が起こるかわからない、いつまで撮るのかわからない、という状況の制作もあります。

【小澤】 今回の Zoom は、地球の裏側、時差が全く反対の状態です。森際さんもあちこちフラフラ行ってるみたいですけど（笑い）、お二人がニューヨーク、さらに

コロンビアに辿り着く、先ほどのお話でいくと、いろんなことを経験されて、悩んで、苦しんで、だけど、その悩みと苦しみから逃げない。そこに向き合っていく中で今の地点にたどり着いた。この動画は学生さんが見ていて、学生さんは今まさに手探りで人生を切り開こうとしているところなので、ニューヨークやコロンビアにたどり着かせた自分なりのきっかけを伺っていきたいんですけど、いかがですか。

【名倉】 本当に自然の帰結と言いましょうか。ニューヨークにいたことが私の人生のゴールではありませんけれども、特に私は銀行時代に悶々とした時期が長かったですね。具体的に言いましたら、父の死や母との関係、銀行の業務に自分の才能の限界を感じたり、自分はここじゃないなという思いが強かったです。そういう根本的な日常生活の問題を誤魔化さなかったというのが、私は良かったと思うんですね。それに向き合ったんです。どういふふうにしたらいんだろうか、これをどういふふうにして解決したらいいんだろうか、が自分のテーマやったんです。特に二十代。心苦しき、何かモヤモヤしている。自分の人生これでいいんかなと、こんなんじゃないんじやないかと、いろいろ考えました。そこで、本を読んだり、友達に話したり…、いろいろありますけれども、私の場合は、た

またま出会いました加藤さんというお婆さんを通じて、仏教、蜂屋先生に出会いました。二十代前半で比較的早く仏教に出会ったんですね。

仏教は苦しみからの解放です。個人的に抱えている、なかなか人に話せないような問題を、どういうふうにして、苦しみの原因はどこから出てきているんだろうか、ということをお教は徹底的に、深く深く掘り下げた教えだなど、私も出会って気づいたわけですね。仏様のお話をずっと、聞いて、聞いて、そういうふうが始まったわけですから、私は非常に幸せなんですね。どこに悩んでいる原因があるのか、だんだんクリアになりましたし、そうしたら、そこからモヤモヤが晴れてきたわけです。そして、二十代、三十代にストラグル (struggle、もがく、悪戦苦闘する) いたしましたけれども、それが全て良かったわけですね。「全てのことには意味がある」仏教の日めくりカレンダーにも載っています。私は苦しんだお陰さんで、浄土、ピュアランド、広い世界に……。この自分の体験を、自然に、やっぱり喜びなんでしょうね。特に三十八歳の時に行き詰まり、危ないところまで行きましたが、私自身、人間は本当に危うい存在であるということを体験しましたから、そこから本当に解放されて、今は本当にありがたいなという日々を生かさせていただいてるんですけど、その喜びが自然に、私自身、坊さんとして生きようということが、だんだ

んと、ハワイ、ニューヨークにと、出会いを求めて自然にいつているわけでございます。

【小澤】 名倉さんは、大学を卒業する直前にお父様を病気で亡くされて、お母さんとの葛藤とか、ずいぶんいろんな悩みを抱えて銀行員として働いておられたという話だったんですけど、水上さんの場合は、聞きようによっては、二〇〇七年にテレビの世界ということで、本当に多くの人が憧れる世界に入っていかれたんじゃないかなと。かつ、そこから更にニューヨークに行つて、ニューヨークで映像作家として勝負していくという、若い人からしたら夢を叶えていった人かなと、そこだけ聞いてると。そういう人が先ほどのお話だと、行き詰まっていたところがあったとのことでしたが、その思いはどんなものだったんですか。みんなが欲しいと思いつながら、なかなか手に入れられないものを手に入れつつあって…、という状態だったと思うのですが。

【水上】 名倉さんの話と通じるんですけど、僕も東京のテレビに入ったきっかけも、ニューヨークに移ったきっかけも個人的な事情で、何かに憧れて、こうしたいなと、きちんと計画を立ててやってきた人間ではないんですね。本当に無計画な人間というか。東京の時

でいうと、たまたま、ご縁で、会社の社長さんとお会いしたのが一社目の面接だったんですけど、フジテレビでとても有名なディレクターさんなんですが、僕はその面接でボロボロ泣いてたんですよ、号泣していて。それは、その人の話がとても人を打つというか、その人の人生経験がアツすぎて、その場で圧倒されたんです。東京の表参道、ファッションストリートの裏にあった制作会社だったんですけど、その方に「水上、いいか。お前は、表参道を歩いている人ではない、道の脇に生えている雑草だと思え」と最初に言われたんですよ。一番最初の面接ですよ。そこから彼のドキュメンタリー論とか、テレビ論を聞いたんですけど、その話が二十二歳の僕にはあまりにも重すぎて、圧倒されてその場で泣いてたんです。本当にその人の人間性に惚れて、この人に付いていきたいなと思ったのが理由だったんですよ。

ニューヨークに行った時も、さつきお話したように、自分の視力障害の問題があって、どん底の部分でそれをどうにか打開したいとか、自分の中で何か策を見つけないとか。自分の夢を投げ出すか、壁を越える力をどうにか手に入れるか、の二択しかなかったんです。でも、夢をあきらめるという選択が自分の中では「逃げ」のようにも感じていたので、突き抜けるしかなかったんですよ。それがニューヨークじゃなくても、パリでも、

ブラジルでも、どこでも良かったと思うんですけど、たまたまのご縁で、ニューヨークの大学院の映像学科に出会って、引っ張ってもらったところなので、自分としては計画を立てて、「ニューヨークに行く」って決めて、どんどん夢を成し遂げたというよりは、その場、その場の、自分が必要だったことに純粹に従っていった、という所が本当の部分です。

コロンビアに来たのも、ニューヨーク時代に撮影していた映画のご縁で会ったコロンビア人の女性がいたんですけど、その人と一緒に生活をするために来たという所も大きいので。名倉さんも人に恵まれていると思うんですけど、僕もすごく人に恵まれているなとずっと感じています。あともう一つ思うのは、海外生活をしていると、正解がないんですね。自分で「何か正解か」必死に考えてやってみるんですけど、だいたい間違になることが多いので（笑い）、それを気にしなくなっていくのか。名倉さん、そういうところありますよね。

【名倉】　そうですね。本当に試行錯誤です。

【小澤】 それは、日本は正解を求めすぎるのか。あるいは、失敗したら「もうダメだ」みたいな気持ちが強くなりすぎるということですか。

【水上】 そういう面もあるかもしれないですね。テレビという業界に六年ぐらいいたので、社会人としての正解ってあるじゃないですか、やっぱり。その部分は経験と共に分かってくるんですけど、海外に行ってフリーランスで仕事をする、今までの常識が通じないので、まず自分の概念とか、持っている価値観を覆すところから入らないと、話をまず聞いてもらえないということもあるかもしれないですね。

【小澤】 壁を打ち破るか、夢を捨てるか。「夢を捨てる」はないだろうと切り開いちゃうエネルギーってすごいですね。今の若者だけじゃなくて、日本人全体が正解を求めて丸く収まろうみたいな気持ちが強い中で、打ち破っていくエネルギーがすごいなと思うのですが、そのエネルギーを持ってしても、水上さんが名倉さんに会った時、ニューヨークで行き詰まっていたというのは、どういう感じだったのですか。だって、もう打ち破ったわけですよ、ある意味。だけどその向こうにもう一つ壁があったということなんですか。

【水上】 そうですね。やっぱり競争社会で、自分が、自分ごと、他の人を蹴落としてでも前に立たないといけないのが常で、本当にニューヨークの人ってモンスターばかりだと思っんですけど（笑い）。すごい人たくさんいるわけですよ。その中で自分がどうにか、前に、前に、と思うと、やっぱり自分と周りを比較するところから始めるんですよね。何で他の人に来て私は出来ないんだとか、何で僕はこうなっちゃうんだとか、考えがちなんですけど、結果、名倉さんと出会って、そこじゃないということが分かって。自分の幸せは自分が決めればいいし、自分の道は自分でしか分らないものなので、他人に「これで合ってますか」って聞いても意味がないというか。その人の言ったことで、自分の左だった意見を右にしても、結局たぶん左に戻るんですよね、自分の色だから。その部分でニューヨークの人って、強い色を持った人が多いんですけど、その中で自分の色が分からなくなつた時期があつたんです。その時に名倉さんを介して仏教に会って、自分の中を見つめる「内観」という言葉を教えてもらったんですね。自分の中を深く見ていく作業を始めた時に、心がスツと楽になつたというか、救われた部分がありましたね。

【小澤】 日常の生活はあまりも忙しすぎるし、やらなきゃいけないこともあるし、いろん

なプレッシャーもあって、自分の中を見るということ自体がなかなか出来ない。その中で、名倉さんとの出会いがそれを教えてくれたという感じですかね。具体的には仏教だったりするわけですけど、自分が頑張っていく時に、一度立ち止まって自分をもう一回見つめる視点に出会っていったということですかね。

さあ、もうずいぶん長くなってきましたが、森際さん、いかがですか。今回、この場を作ってくださった一番の立役者ですよ。ニューヨークとボゴタ、京都を繋いで対談をするというのは、宗教講座で初めての試みでした。こういうことを通して学生のみなさんに、森際さんから、お二人の「ここを掴んでおいてくれ」みたいなところをお話いただけたら。

【森際】 私自身も今、お話を聞いていて、学びというか気づきがあったんですね。ずっと日本にいて、「これは正解」とか、「これは他人の目から見たら間違いかな」とか、意識していた時期が長くて、名倉さんは三十八歳と言われていましたが、自分も三十七歳ぐらいの時に海外に出てみたら、今までの常識って何だったんだらうと、何でこんなことに悩んでいたんだらうということに気づいて、それから、あちこちに顔を出して、チャンスがあ

ればどこへでも行くということをしているんですけど、もっと早く気づいて、この感覚に出会えていれば良かったなと思いました。ぜひ、これを聞いている学生のみなさんも、「これは限界」「これは無理」とか決めるんじゃなくて、我々とかいろんな人と話をして。その中で仏教に触れながらということも出てくるかもしれないんですけど、私は、名倉さんにも、水上さんにも、その手前で人間としての魅力をすごく感じています。良い人たちに恵まれているという話をしましたけど、そういう人たちの集まりってどんどん広がっていくんですね。ですから、そういう人たちに近づいていって話をするとか、そのような動きをしてもらった方がいいのかなと思っていたところです。今日は、ニューヨークと、南米コロンビアと、京都の三ヶ所を繋いで、初めて対談をしました。新型コロナウイルスの影響で、Zoomシステムを使うことが普通になったお陰で実現したことでもあるんですけど、日本国内だけじゃなくて、世界中の方と会うチャンスがあると考えていただいて、今までとは違う一歩を踏み出すきっかけになれば嬉しいなと思っています。

【小澤】 ありがとうございます。最後に名倉さんと水上さんから、学生さんに一言メッセージをいただけたら嬉しいです。

【名倉】 学生さんもいろんなことで悩まれていると思います。せやけど、悩むということ
は、むしろ結構なこと、それを自分だけで抱えんと、私も出会いによって心が開かれ
て、精神的に助けられて、こういうふうにな、歩んでおりますので、特に光華に行って
はるといことは非常に結構なことやと思います。仏教という深い深い教えが基本になつた
学校でございますから、必ず、お友達や先生方、いろんな出会いのチャンスがあると思
いますので、自分に閉じ籠もってしまわずに、出会いが本当に救ってくださると思
いますので、どうかどうか、決していろんなことがあっても絶望せずに、心が開かれる道がある
ということを信じてくださったらと思います。今日はご縁をいただきまして本当にあり
がとうございました。

【小澤】 ありがとうございます。では、水上さん、お願いします。

【水上】 ポストコロナって名前が付いてますけど、誰も、どういうもののか全く解
らない状況だと思います。ですから、みなさんも就職だったり、将来の進路で悩んで
いる方も多いと思うんですが、僕は三十五歳で、ちょっとだけ前を走っているだけ
なんです。

ど、ぜひ、失敗を恐れずに、二十代は失敗しても絶対にやり直せるので、取り返しは何ほでもきくので、不安なことはたくさんあると思うんですが、やってみてダメだったら、その時また考えれば良い、ぐらいの度胸と根性を持って、この時代を生き抜いている皆さんだったら、何か掴めることがあると思うので、頑張ってください。

【小澤】 今回の二〇二〇年一〇月の宗教講座は、全く初めての試みで世界三ヶ所、地球の裏側のニューヨークとコロンビアを繋いで、映画『ピュアランド』に出演された名倉さんと映画監督の水上さん、そしてお二人を光華に繋いでくださった森際さんの三人にお話を伺いました。仏教のお話もいっぱいありましたが、それだけではなく、「正解を求めるところではなくて、失敗を恐れずに、ぜひ一步を踏み出して欲しい」、というのが一番のメッセージだったかなと思います。

みなさん、どうもありがとうございました。